（別紙２）　　審査結果の要旨

論文題目　『エカチェリーナ１世時代（1725－27 年）におけるロシア統治構造の研究』

氏名　田中良英

本論文の目的は、1725 年から 1727 年までのエカチェリーナ１世政府の政策行動、ならびに統治エリート層の動向の分析を通して、ピョートル１世の改革がもたらしたロシア国家再編成が定着する過程と、その再編成が後のロシア専制に対して有した意義とを解明することにある。分析に際して、現在にいたるまでに刊行された史料や、膨大な未刊行史料群がひろく利用された。また、ロシア内外の研究状況の周到な検討を踏まえる一方、欧米などで有力となったプロソポグラフィーの手法や、王権の国家儀礼研究に見られる文化人類学的な方法にも積極的に目を向けている。

本論文の中心となる二つの主題への取組みについては、以下の通りである。

第１に、エカチェリーナ１世の即位式をめぐる状況や国家儀礼の分析、ならびに、新政府の国内・対外政策の傾向の分析を通して、伝統的な大貴族層の間にはピョートル以前の時期へ回帰したり、専制権力を抑制したりする動きが欠如していた事実を確認し、また、ピョートル１世の定めた政府の内政・外政の基本路線にも変化が見られないことを解明した。さらに、改革事業を象徴する官僚制化の問題、とくに俸給問題でも、試行錯誤に充ちていたピョートル１世の改革の試みが、一定の修正を伴いながらもエカチェリーナ１世政府の下ではじめて整備され、定着していった事実を、本論文は確認する。

第２に、ピョートル１世の治世を経る中で、勤務層（奉公人層）と専制君主の相互関係が大きく変化し、伝統的な大貴族、新興貴族、下層の貴族集団も、皇帝権力に対して依存的な集団に転化したという重要な事実を、解明した。まさにこの事実が、ロシア帝権に対して、変化する近代世界の中でも強力なリーダーシップを発揮させた背景ともなった、との重要で、説得力のある結論を導き出している。

なお、しばしば帝権を弱めるものとうけとめられてきた寵臣も、実際には「制度としての専制君主」を補完するものであったことを、確実な史料に基づき明確に論証した。

本論文は、法令（公布、非公布併せて）の悉皆調査とその分類作業や、関係する時期のほぼすべての嘆願書（文書館史料）の調査などに基づいて勤務層（奉公人層）の心性や行動様式を分析し、統治の実態を解明した点で、ならびに多義的で、不確定の要素の多いエカチェリーナ１世治下ロシアにおける基本的事実関係を、一次史料に立ち返って確定した点などでも、国際的な水準に照らして重要な貢献と評価できる。

たしかに叙述の仕方、概念設定、訳語などの面で、若干の工夫や彫琢の余地は残されている。しかしながら、本論文の達成した上記の顕著な成果を鑑みて、審査委員会は一致して、本論文に博士（文学）の学位を授与するのが適当であると判断した。